



2013 年度
アンコール遺跡整備公団
インターンシップ報告書

金 沢 大 学

アンコール遺跡整備公団インターンシップ実施委員会

2014 年 1 月



写真 1. 初出勤前にホテル玄関にて（左から、笠井賀織、笹田絵美、島村陽恵、中村瀬奈、村井芙美加、辻昌希、小林睦実、富田風華、田原綾女）。

写真 2. 業務初日のアプサラ公団職員との顔合わせと自己紹介。

写真 3. 業務地へは担当職員とともにバイクで移動（グループ 1, 2, 4）。

写真 4. 業務終了後はチューターの指導を受けながらその日の報告書をまとめる（グループ 3）。





写真 1. シェムリアプ川に新しく建設された水門の視察（グループ 3, 4）.

写真 2. 北バライのニャックポアンへ通じる観光ルートの視察（グループ 3, 4）.

写真 3. エコビレッジの家屋内の見学（グループ 2）.

写真 4. アンコール・ワットの見学（グループ 2）.

写真 5. アンコール・トムで彫刻体験（グループ 1）.

写真 6, 7. 午後は公団本部で職員たちとの資料の整理, 報告書の作成（グループ 1, 3）.





写真 1. 休日に訪れたトンレサップ湖畔のハス畑.

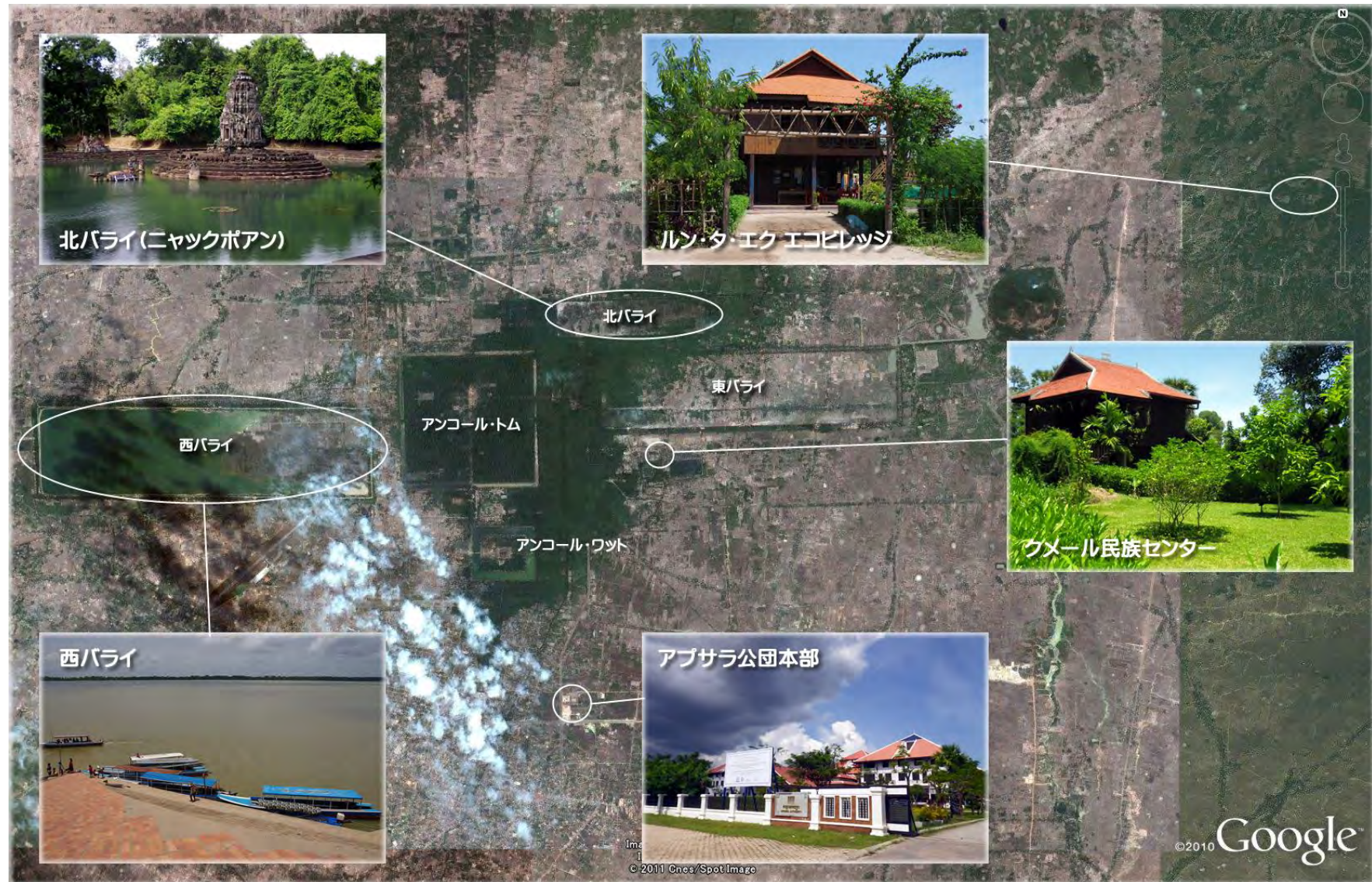
写真 2. 休日に訪れたバンテアイ・スレイ遺跡.

写真 3. シェムリアプ市内の児童保護施設を訪問.

写真 4. 受入責任者のハン・プウ副総裁と面談するグループ 3.

写真 5. アプサラ公団での全業務終了.

写真 6. お世話になった公団職員のみなさんとの夕食会.



学生たちの業務地（グループ 1：北バライ，グループ 2：クメール民族センター，グループ 3：西バライ，グループ 4：ルン・タ・エク）

2013 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ報告書

目 次

1. はじめに	村上清敏	・・・	1
2. The Fourth Internship Programme	Hang Peou	・・・	2
3. インターンシップの成果と今後の課題	塚脇真二	・・・	3
4. 参加学生たちの報告			
1) カンボジアでの2週間	笠井賀織	・・・	7
2) アンコールインターンシップに参加して	小林睦実	・・・	10
3) アンコールインターンシップに参加して	中村瀬奈	・・・	13
4) カンボジアと私	田原綾女	・・・	17
5) アンコールインターンシップ報告	辻 昌希	・・・	20
6) インターンシップに参加して	富田風華	・・・	24
7) アンコールインターンシップに参加して	村井芙美加	・・・	27
8) アプサラ公団でのインターンシップを終えて	島村陽恵	・・・	30
5. チューターの報告			
1) 2度目のカンボジア	笹田絵美	・・・	33
6. 埼玉大学の海外フィールド実習報告			
1) 金沢大学の海外インターンシップと埼玉大学の海外実習	荒木祐二	・・・	35
2) カンボジアでのインターンシップを間近で見て	片野清夏	・・・	38
3) 現地体験の大切さ	山田晴菜	・・・	40
7. 資料：2013 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップの概要		・・・	42

図版1：インターンシップ初日の始業式と公団職員との打合せ.

図版2：インターンシップでの現場業務のようす.

図版3：休日とインターンシップ最終日.

図版4：アンコール遺跡世界遺産公園と各グループの業務地.

1. は じ め に

金沢大学人間社会学域国際学類長 村上清敏

今年度も8月24日から9月7日までの間、アンコール遺跡整備公団インターンシップが実施された。8名の学生+チューター1名が参加した4年目にあたる今年のインターンシップの昨年までとの違いと言え、①参加学生の所属学類が自然科学分野も含めた多岐にわたったこと（ただし昨年同様、参加者はすべて女子学生）、②大学本部の広報から廣田さんが参加され、広報活動にあたられたこと、③種々の事情から、環日本海域環境研究センターと国際学類との共同開催となったことがあげられる。①に関して言うなら、それぞれの関心領域が多彩なことから、さまざまな場面で、議論が大いに深まったと聞いているが、学類長としての立場から言えば、国際学類の学生にもっと応募してほしい、というのが正直なところである。②については、本インターンシップが種々のマスコミでも取り上げられ、金沢大学のグローバル化推進の一翼を担うものであるという現状からすれば、時宜を得た配慮であり、本インターンシップが学内、学外でこれまで以上に認知される契機になればと思っている。③に関しては、共催という形を取るとはいえ、学類としてはこれまでどおりの協力を惜しまないつもりである。

今回も、環日本海域環境研究センター、塚脇真二教授には、PR活動や公団との折衝を含む準備段階、参加学生の選考、緊急連絡網の設置、学内のさまざまな組織との交渉、カンボジア国内諸機関への根回しなどなど、大変なご尽力を賜った。現地では参加学生の後方支援にあたってくださったばかりか、毎日欠かさず、多くの写真を含む詳細な報告を几帳面に送ってくださったことも、留守を預かる者としては大変にありがたいことであった。この場を借りて、篤く御礼申し上げたい。また、今回、チューターの任にあたってくれた国際学類4年生笹田絵美さんにも、御礼申し上げたい。貴女の笑顔と配慮が、参加学生にとって、どれだけ心強いものであったか。無論、今回も快く学生を受け入れてくださり、手取り足取りの業務指導をしていただいた遺跡整備公団職員の皆様には満腔の謝意を表さなければならない。

最後に、本インターンシップが来年以降も継続され、今後ますます金沢大学のグローバル化を推し進める目玉のひとつとなることを祈って、ご挨拶としたい。

2. The Fourth Internship Programme

APSARA National Authority
Deputy Director-General Hang Peou

This year is the fourth year of our internship programme. The students of this year were also very eager to learn on Khmer culture through our internship programme in the Angkor World Heritage. The programme was held from the 26th of August to the 6th of September 2013, all students worked with APSARA staffs on four projects such as rehabilitation of North Baray, rehabilitation of West Baray, Khmer Habitat project, and Run Ta Ek eco-village project.

On the first day of the programme, I was absent due to an overseas mission, but Professor Shinji Tsukawaki and my staffs organised above stated activities well as like as other years before. On the first day of the second week, I made a lecture for the students on the whole works of the APSARA National Authority and our vision on the safeguard and sustainable development of the heritage. I had many questions during and after my lecture from them. It gave an exceptional impression for me. I understood because they already had worked in the fields and had understood our challenges. I grasped a certain improvement of our internship programme.

On the final day of the second week, I had a time to discuss with our students for evaluation. All students gave their feelings of satisfaction through their learning, their adaptation with the APSARA staffs during their works, and their well understanding of Khmer cultures back to me. When the evaluation session was finished, a student gave me an unexpected question “Why the local people have so many children?” that I had never considered before. My friendly answer was “They have much time”. She raised another question to Professor Tsukawaki in Japanese which I could not understand. She laughed with other students when they had his reply. Her second question was “How many children does Mr Hang Peou have?” Because of this conversation, I really understood that they were looking in detail differences between two cultures. It should be a very good case study. Finally, I wish to emphasise that ‘a long live our Internship Programme!’



夕食会にて Peou 副総裁を囲んで

3. 2013 年度インターンシップの成果と今後の課題

環日本海域環境研究センター・教授 塚脇真二

カンボジアのアンコール遺跡整備公団（略称アプサラ公団）での学生インターンシップも今年度で4回目の実施となった。かねてから予定されていたアプサラ公団本部の総合移転がインターンシップ期間の終盤に急に実施されることになり、これによる業務予定の急な変更や中止などがあったものの、**Hang Peou** 副総裁をはじめとする公団職員たちの手厚い指導（写真1、2）と学生たちの積極的な節度ある行動とによって全予定を無事に終えることができた。関係諸氏に心からの謝意をまず表したい。また、このたびのインターンシップの実施にあたっては、本学中村信一学長に財政的な支援をいただいた。本学中村慎一理事，同国際学類村上清敏学類長，ならびに同環日本海域環境研究センター早川和一センター長には，インターンシップの実施にあたりさまざまな支援をたまわった。ここにあわせ感謝の意を表する。



写真1. Hang Peou 副総裁による講義

このインターンシップの企画から，参加学生の募集，そしてインターンシップの実施にいたるまでの日程などは巻末の資料を参考にされたい。今年度の参加学生は，国際学類3年生1名，経済学類3年生3名，地域創造学類3年生1名，そして物質化学類，環境デザイン学類，保健学類の2年生各1名の計8名でありすべて女子である。学生たちは例年どおり2名ずつの4グループに分かれ2週間をとおして同じ業務に従事した。



写真2. 公団職員による現地での説明

今年度の参加学生たちも，現地での協調性や積極性，社交性などのすべてにわたって申し分のない学生たちだった。なお，今年度の参加学生たちは，平成25年度金沢大学海外学習奨励費10万円を受け取っている。この奨励費によって学生たちの経済的負担を半分以下に減らすことができた。

昨年度のインターンシップに参加した国際学類4年の笹田絵美が今年度はチューターとして参加学生に同行した（写真3）。現地での生活や公団での業務にかかる参加学生たちの

相談相手，学生たちと公団との間に入っての連絡や時間調整，学生たちの安全管理の補助と多岐にわたるチューター業務であったが彼女はこれらを的確にこなしてくれた。また，本学総務部広報企画係の廣田典之氏がこのインターンシップの取材のため現地を訪問している(写真4)。一方，インターンシップ期間の後半に合わせて，埼玉大学教育学部の荒木祐二准教授が同大学の海外フィールド実習を実施している(写真5)。

今年度のインターンシップで特筆すべきことは，1) 国際学類からの参加が激減する一方で経済学類からの参加が急増し，参加学生の学類構成の多様性が増したこと，2) 埼玉大学の海外フィールド実習との一部合同実施となったこと，の2点である。このインターンシップの主催部局である国際学類からの参加が少なかったのは残念な点であるが，参加学生の学類構成の多様化にはさまざまなよい相乗効果や波及効果があった。学生たち個々の多様な興味が他の学生の関心を呼び，それが連鎖的に広がっていくというよい傾向が随所で見られた。たとえば，保健学類の学生の地域医療体制への興味が地域創造学類の学生の地域社会問題の関心を呼び，それがさらには経済学類や国際学類の学生たちの地域社会経済問題や国際協力への好奇心を刺激した。これを踏まえての参加学生たちと公団職員たちとの議論も例年以上に活発だった(写真6)。

一方，時期をあわせての埼玉大学のフィールド実習の実施は本学のインターンシップの将来にとってきわめて明るい材料といえる。引率の荒木准教授はカンボジアでの活動歴が10年を超えており，わが国においては同国の情勢にもっとも習熟した研究者のひとりである。海外インターンシップと海外フィールド実習とでは活動内容は異なるものの，現地で



写真3. チューターによる始業前の打合せ



写真4. アンコールワットでの廣田氏の取材



写真5. 埼玉大学の海外フィールド実習

の活動の一部を重複させることで、学生たちの安全管理体制をより堅固なものにすることができ、さらにはお互いの負担を減らすことにもなる。また、大学の垣根を越えた学生たちの交流には前述の学類構成の多様化と同様のよい効果を見ることができた。

インターンシップ期間中の学生たちの活動については学生たちの報告書をご覧ください。このインターンシップの成果は例年と同様、以下の3点に集約される。



写真6. 公団職員と学生とのディスカッション

学生たちへの「教育効果」、成果の「現地への還元」、そして本学の国際貢献にかかる「周知（宣伝）」である。これまでとほぼ同じ内容になるが以下に記述する。

（1）学生たちが大きな満足と大きな経験とを確実に持ち帰ることができた（教育効果）。華やかに喧伝されるばかりの世界遺産であるが、その維持管理や観光客の便宜のためにどれほどの労力がその裏側で費やされているかを公団での業務をとおして参加学生たちは実体験することができた。また、昨今のはやりの言葉である「持続可能」のために、さまざまな苦労がその背後あることを経験した。「最初のイメージとはおおきく違っていた」とは今年も学生の口からもれていた感想である。これとともに「貧しい発展途上国」というイメージが先行するカンボジアのくったくのない人々や豊かな自然に学生たちは日々触れることもできたし、さらには国際協力の舞台であるとともに地域住民が暮らす世界遺産公園の特異性を目の当たりにした。「国際貢献」と「地域社会」という2つのキーワードを学生たちは実体験したことになる。学生たちの報告書にはこの2週間の体験が生き生きとつづられている。したがって、このインターンシップでの2週間は学生たちにとってきわめて充実したものだったと客観的に評価されよう。これはこのインターンシップの実施が学生たちへもたらした大きな教育効果といえる。

（2）学生たちを指導することによって公団職員に大きな教育効果をもたらした（現地への成果の還元）。参加学生たちはそれぞれの業務の担当職員たちとともに公団の通常業務に従事した。学生たちの同行が彼らの業務の支障になった点是否定できないが、インターンシップ終了後に公団上層部から、学生たちの存在が職員たちに大きな教育効果をもたらしたことを例年と同様に感謝の意とともに指摘された。具体的には、1）学生たちを案内することで職員たちの「説明」の技術が向上したこと、2）職員たちが説明する「楽しみ」や「喜び」を味わったこと、3）業務についての全般的なことを学生たちに説明することで、職員たち自身が業務内容を総括することができたこと、である。

（3）学生たちの活動がアンコール世界遺産公園で大きな話題となった（宣伝効果）。安全管理の観点から、参加学生たちはアンコール遺跡整備公団の制服を着用して日常の業務に

従事したが、カンボジアではエリート集団として知られる同公団の制服を日本人の学生たちが着用するのはきわめて目立つものであり、現地の人々や日本語観光ガイドたち、彼らが案内する日本人観光客におおいに注目された。参加学生たちが制服にアプサラ公団のロゴとともに本学のロゴをつけて業務にのぞんだことも効果的だった。したがって、このインターンシップは世界遺産における本学の国際的な貢献活動として一定の宣伝効果をあげたといえよう。

アプサラ公団での海外インターンシップを将来にわたって継続するための基礎と実績は十分に確立できている。これを長期的に継続するための懸案のひとつであった他大学との合同での実施については、埼玉大学の海外フィールド実習との合同開催によって大きな展望が開けてきた。人的あるいは経済的な継続的支援体制の確立についてはまだ問題が残されているが、これはさらに時間をかけながら解決すべきかと考えている。

なお、来年度の実施にあたって懸念されることは、冒頭でも述べたとおり、アプサラ公団本部がシェムリアプ市の郊外に移転してしまったことである（写真7）。かつての本部はシェムリアプ市街地に近く、またアンコール世界遺産公園に隣接していたため、学生たちが宿泊するホテルからの通勤や業務地への移動が容易であったが、移転先は市内のホテルからの通勤や業務地への移動に片道30分以上がかかる距離にある。



写真7. アプサラ公団新本部

新本部の周辺には宿泊施設や食事をする場所がまだ整備されていない。この問題については、業務地の変更や宿泊地の再考など、現地の整備状況を見ながら公団側と協議を進め解決を図る予定である。

4. 参加学生たちの報告

1) カンボジアでの2週間

人間社会学域国際学類3年 笠井賀織（グループ1）

私は、今回のカンボジアでのインターンシップで、様々な経験をさせていただいた。実際にカンボジアに行く以前は、カンボジアは貧しくて暑くて不衛生で、つらい状況のなかでどれだけ自分が頑張れるかをためてみようという気持ちで臨んでいたが、2週間カンボジアで過ごし、様々な場所を見学し、カンボジアに対する印象ががらりと変わった。実際、貧しいと感じることや、不衛生だと感じることも多々あったが、それ以上にカンボジアに対するプラスの印象が増えた。過酷な状況の中で過ごす人々も目にしたが、彼らの笑顔を見ていると、日本人よりもはるかにカンボジア人のほうが心は豊かであると感じた。

私たちグループ1は、北バライを中心に活動しているチームのみなさんにお世話になった。バライとは貯水池という意味であり、北バライ、西バライ、東バライ、南バライが存在する。その中には以前は水を蓄えていたが、今では水がなく、人々がそこに住んでいるという特殊な例も存在する。公団の方は、今は水がなくなってしまったこの地域にもいずれかは水を入れたいと考えているが、人々が住んでいるのでどうすることもできない、とおっしゃっていた。水はカンボジアの人々にとって（もちろん世界中の人々にとっても）非常に重要なものである。それゆえ、この地域に水を入れるかどうかは、かなり難しい問題になっている。バライでは、雨季には乾季にむけて水を貯え、ゲートを上げ下げして川を流れる水の流れを調節するスライドゲートというものを利用して水を管理している。農作地域に水を供給し、洪水の際にも不可欠なものである。また、山から流れてくる水を北バライの近くのゲートで止めて、そこを分岐点として川を3本に分けていた。この分岐点は非常に重要なものである、と公団の方はおっしゃっていたが、それにしては設備が不十分だなどと思ったのが、私の本音である（写真1）。



写真1. 流れを調節するスライドゲート

また、北バライの水は、人々の生活に使われるだけでなく、遺跡を保護する役割も担っている。水は地下を浸透し遺跡の土台を強化している。業務で北バライの近くの遺跡をいくつか視察したとき、建物が崩壊している部分を多く目にした。かつては遺跡の一部であったであろう石がごろごろとおいてあったり、バンドのようなもので崩れないようにしてあったり、大木が遺跡にまわりついて、木のおかげでかろうじて崩れないでいるような遺跡も多々あった。ただ古いから崩れてしまったというわけではなく、地下からの水の浸

透が少なかったためにこのようになったと、公団の方は悲しそうにおっしゃっていた。水の重要性を改めて認識できた。

北バライの中心にはニャックポアンという遺跡があるが、この遺跡について私たちは詳しく知ることができた（写真2）。病院として利用されていたというこの遺跡の仕組みや、水の流れ、それを囲う土手やお堀の役割など、北バライのことを学ぶ上で重要な点が、このニャックポアンには凝縮されているように感じた。他の遺跡とは違い、この遺跡には水がたくさんあり非常に美しかった。観光客では入れないような場所まで見せていただき感動した。



写真2. ニャックポアン遺跡

観光客として、そして、アプサラ公団で働く職員としてのふたつの目線から、様々な場所を視察することができて、よい経験になったと思うし、考えさせられることも多々あった。人が住む世界遺産という特殊なこの観光地は、ただ観光地として整備すればいいというわけではなく、人々の生活を考えながら開発するという点に、多少の難しさを感じた。

業務では主に、午前中に貯水池や水門や遺跡や村などを視察したのに対し、午後からはディスカッションの時間であった（写真3）。遺跡の説明や水の重要性など、様々なことを教えていただいた。それに加え、実際に目で見えて感じたことや、改善したほうが良いと思ったことなど、自分の意見を話した。私はこの時間を少しつらいと感じていた。カンボジアの状況について考えるとき、どうしても心の中で日本と比べてしまった。カンボジアの状況を見て思うこと



写真3. 午後のディスカッション

はたくさんあり、それを公団の方に伝えたいという気持ちは非常にあった。しかしそれは、カンボジアの技術や経済状況ではどうしようもないことが多かった。日本のほうがはるかに優れた技術を持っているから、カンボジアの道やダムなどの設備が劣ってしまうのは当たり前前のことである。もっとこうしたほうが良い・・・と思っても、簡単に口にすることはできず、葛藤した。ある日、人々の生活に使われた水はどのように川に戻っているのが気になり公団の方に質問した。水をきれいにして川に戻すというシステムは多少あるようだが、全地域までは徹底されていなかった。シェムリアップを流れる川はトンレサップ湖に流れ着く。トンレサップ湖の水は非常に汚いそうだ。業務のない休日にトンレサップ

湖を訪れ、水上に住む人々の様子を見た。そこには学校もあり、人々は普通に生活をして
いた。しかしトンレサップ湖の水は汚すぎて現地の人でもほぼ使わないそう。この状況
を聞いたとき、すごくショックであったし、日本のように浄化システムを使えば・・・と
心から思った。『日本にはお金も技術もある。しかしカンボジアにはそれがない』この言葉
を聞くことが本当につらかった。

たった2週間のカンボジア滞在であったが、私は本当にカンボジアのことが大好きにな
った。ホテル暮らしだから、おいしいものばかり食べていたから、ということもあるだろう
が、私は本当にカンボジアの人々の人柄の良さに魅かれた。公団の方も、市場の方も、村
に住む方も、子どもも、毎日汗水流して働いているのに笑顔が絶えず、みんなキラキラし
ていて、本当に最高の国だと思った。だからこそ、カンボジアにはお金がないから、技術
がないから、と、マイナスの言葉を聞くたびに非常に心が痛んだ。私にはどうすることも
できないことが、悔しい悲しいと感じた。今、自分は本当に無力である。社会にでたら、
少しでも何かの役に立てるようになりたいと心から思った。

また、カンボジアでは多くの子どもが働いている
ということが衝撃的であった。本当に小さい子が赤
ちゃんの世話をしている場面になんども出くわした
(写真4)。観光地では、自分の体よりも大きな籠を
さげて、観光客に近寄り、土産を売っていた。格差
があると感じた。しかしここでもどうすることもで
きず、笑顔でやんわりと商品を断ることしかできな
かった。また、孤児院にも行かせていただいた。こ
この子どもたちは本当に元気で、私たちが持って行
った遊び道具を見るやいなや、すぐさま飛びついて
みんなで遊んだ。英語を話せる子もいて、親がいな
いという状況でもたくましく育っていることに感動
した。



写真4. 村の子どもたち

他にもこの2週間で、公団の方に神話について教
えていただいたり、開発中の村に行ったり、公団の
方にクメール語を教えていただいたり、業務後に公
団の方とバレーボールをしたり、遺跡の中で合唱したり、市場でねぎったり、未知な食べ
物を食べてお腹を下したり、様々なことを経験できた。毎日楽しいことばかりであったが、
その中でも考えさせられる場面は多々あり、頭をフル回転させていた2週間であった。

この2週間は本当に忘れられない思い出だ。このような機会をあたえてくれた学校や先
生、また現地の人々に心から感謝し、この経験を今後の勉学や生活に活かしたい。

2) アンコールインターンシップに参加して

人間社会学域経済学類 3 年 小林睦実 (グループ 1)

私は、8 月 26 日から 9 月 6 日までの平日の 10 日間、アンコール遺跡公団（アプサラ公団）の水資源管理部門でアンコール世界遺産インターンシップのお世話になった。私がこのインターンに応募したきっかけは、将来、旅行や観光に携わる仕事に就きたいと考えていて、多くの観光客を集めるカンボジアのアンコール遺跡群ではどのような仕事が行われているのかと興味を持ったからである。

業務は、午前中は主に視察、午後にディスカッションという形で進められ、ディスカッションでは意見の交換、質問をするという形で進められた。私は北バライ周辺を管理するチームでお世話になった。北バライはアンコール遺跡群にある 4 つのバライ（人工貯水地）のひとつであり、中心にはニャック・ポワンという非常に美しい遺跡があり、現在、新しい観光名所として開発されている地域である。北バライは過去に管理されておらず、水がなかった時期が



写真 1. 北バライ（ボートの上から）

あり、その時に生えた木々が多く残っており、その光景が神秘的で美しい（写真 1）。私達は、北バライ視察ということでボートに乗せてもらったが、「観光客も乗れたらいいのに」と公団の方に伝えると「観光客も行ける」ということ。ガイドブックにも載っておらず、ボート乗り場までの道も険しく狭く、観光客が行けるようなところではない。もっと整備してアピールしていくべきだという意見を伝えた。また、バライは観光地として使用する以前に村や遺跡に水を供給するという役割があるので、そのために今の北バライに生えている大きな木は伐採されることが検討されている。バライの景観は観光客を集めるには大切だが、水は村の人々の生活に欠かせないものである。観光開発とそこで暮らす人々の生活の維持のバランスを保つことは難しいことであると感じた。

私たちがお世話になったのは水資源管理部門であり、水門や川などにも連れて行っていただいた。北バライの北東にあるスピアン・トム（クメール語で「大きな橋」



写真 2. スピアン・トム

という意味)はクーレン山地から流れてくる水をアンコール遺跡群や農地に流す分岐点であり、またゲートを上下させることで水の調整している(写真2)。遺跡を管理する上で、水は非常に重要な役割をしている。遺跡の基盤となる土地は乾燥している状態では弱く、土地が弱いと遺跡が崩れたりしてしまう。そのため、地下から、または、雨で土地に水を含ませることにより強度を増している。寺院の周りにお堀やバライがあるのは水を供給するためということでもある。

業務の最終日にはアプサラ公団の副総裁であるプーさんとお話しをする機会をいただいた。その際に、経済について質問をしたところ、カンボジアの約8割は貧しい層であるとおっしゃっていた。しかし、その貧しい層にはアプサラ公団で働く方々も含まれるとおっしゃっており、その貧しい人々の8割の中でも格差があるのだろうと感じた。

業務後や休日は、シェムリアップの市場や町で買い物などを楽しんだ。カンボジアは日本に比べて大変物価が安く、マッサージが10ドル(約1000円)以下であったり、お酒落なペディキュアが5ドル(約500円)でしてもらえたりと、安さとカンボジアでこんなことが出来るのかと驚いた。また、カンボジアに行くと言うと、「不便そう」、「食べ物美味しくなさそう」と言われることがある。しかし、食べ物はカンボジアの伝統料理から、カレー、ピザ、中



写真3. トウクトウ

華料理など種類豊富で大変美味しい。滞在に必要なものはスーパーで揃えることができ、ホテルを始めレストラン、カフェではWi-Fiが使用可能である。交通もトウクトウ(写真3)に乗れば大抵の場所には、連れていってもらえる。このようにカンボジアは観光する上で大変魅力的である。しかし、それが人々にあまり知られていないことが残念である。

カンボジアでの滞在で印象に残ったことは、公団の方に遺跡を視察する際に、その遺跡はその時代に、誰が建てたかなどの歴史や、何の神を祀っているかなどを教えていただき、しだいに、この遺跡のデザインはいつの時代か、この神様の名前は何かなど、遺跡を見るだけでわかるようになった。私は以前にアンコール遺跡群を訪れたことがあったが、ただ観光しているだけでは遺跡の迫力に圧倒されるだけで、細かな所までは見ることはできなかったが、今回新しい見方ができてさらに興味を持った。

私は、このインターンを通して多くのことを経験し、学んだ。

まず、伝えようとすることの重要性である。業務は全て英語で行われ、慣れない英語に非常に戸惑った。公団の方はゆっくりとわかりやすく、わからないところは何度も説明してくれ、理解をすることができた。しかし、その説明を聞いて疑問や意見が出てきても、最初は、どのように言ったらいいかわからない、上手く伝えられないと思い、消極的であ

った。徐々に、英語に慣れていくうちに少しずつ伝えられるようになり、意見を伝えることで相手の意見も引き出すことができ、さらに理解や考えを深めることができたことがわかった（写真4）。これは英語だけでなく、日本語でも同じであると感じた。また、伝えることは英語に関することだけでなく、カンボジアの観光に対して必要なものであると感じた。アンコール遺跡は魅力的な観光資源であるが、アンコールワット、タ・プローム寺院など有名な場所に人が集まり過ぎているという問題がある。有名所のほかにも多くの素晴らしい遺跡があり、そのような所にもぜひ観光客に足を運んでももらいたい。そのためにも、魅力を伝える、アピールしていくということが重要である。



写真4. ディスカッションのようす

このインターンで学んだ自分の意見を伝えるということは、これから就職する上でも重要なことである。また旅行や観光に携わる仕事に就いたときには、旅行地、観光地の魅力を最大限に伝えられるようになりたい。

最後に、このアンコールをとおしてお世話になったアプサラ公団の方々、チューターの絵美さん、運転手のペンさん、埼玉大学の方々、このような素晴らしいインターンを準備して下さった大学の方々、また、関わった全ての方々に感謝したい。

3) アンコールインターンシップに参加して

人間社会学域経済学類 3 年 中村瀬奈 (グループ 2)

私がこのインターンシップに参加しようと思ったきっかけはふたつあります。ひとつめは、大学に入学する前から世界経済の動向や発展途上国の経済成長に興味があり、実際に発展途上国に赴き、文化や経済政策の違いについて日本と比較することが在学中の目標であったため、今回のインターンシップがその目標を達成する良いチャンスだと考えました。ふたつめは、現地で英語を使って業務をするということで、自分の英語力の向上につながりたいと思ったからです。実際に 2 週間現地で英語を使ってみて、自分のコミュニケーションスキルを少し高めることができた実感でき、同時に英語学習に対する意欲向上にもつながりました。

私はインターンシップに行く前にカンボジアについての下調べをしていなかったため、カンボジアについては遺跡や自然が多いといった漠然としたイメージしかなく、反省点としては国の特徴や遺跡の名前、特徴を掴んでから業務を行えば良かったと思いました。カンボジアは、思っていたよりもすごく経済成長が進んでいることがわかり、人々の暮らしを自分の目で実感できたことは大きな収穫です。また、遺跡については様々な遺跡があり、三大観光名所（アンコールワット、アンコールトム、タプローム）を周って、それぞれの遺跡の歴史、神話、特徴などの知識を習得できました。事前に下調べをしておけば、英語もすんなり聞き取れたのかなとも思いました。

業務は、大まかに午前と午後に分かれます。私の班は、基本的に午前中は遺跡や村などを訪れてそこで説明を受け、午後は、午前中に学んだことについてディスカッションをしたり、レクチャーを受けたりする形でした。私たちはクメール民族センターのグループだったので、主にカンボジアの建築様式や家の特徴について学びました。

カンボジアの建築様式には 5 種類あることがわかりました。特徴を簡単に紹介します。

① クメールハウス (The Khmer or Koeung House)

- ・値段が高いため (約 500~1000 ドル)、身分の高い人しか建てられない。
- ・寺院のモデルと造りが似ている。
- ・屋根が二重構造になっているのは、神が天に存在するとされており、少しでも屋根を高くすることで神に近づけたいという思いと外観をカッコよく見せるためだそう。

② カンタンハウス (The Rong or Kantang House)

- ・材料はタイル (値段が高い) 竹、パームの木の葉 (値段が安い) など。
- ・屋根が V の字型 (シャープ) で、切妻が 2 つある。
- ・屋根の拡張はできるが、雨よけ・日よけの部分の拡張はできない。

③ ロンランハウス (The Rong Dorl House)

- ・正面の棚が重要。入り口を雨から保護する役割を果たす。また、小屋は客を迎えたり団欒をする際に使用。
- ・換気しやすい設計。

④ ロンルンハウス (The Rong Doeung House)

- ・二つの雨除けと二つの切妻がある。換気ができるように隙間がある (写真1)。雨に濡れても木が腐りにくいという利点もある。
- ・家の拡張が難しい。

⑤ パットハウス (The Peth House)

- ・屋根にクロス梁があるが、切妻はない。
- ・家の前にベランダ (バルコニー) が存在。
- ・接待スペースには各家庭に異なる装飾や物が置いてあり、それが社会的地位を示す。



写真1. ロンルンハウスの床

その他に習ったり気づいたりしたことは、

- ・カンボジアでは各家の円柱、お寺の中心に神が存在し、各家や寺、村や集落、それぞれを保護するとされている。また、ルンタエク村を訪れた際に、地域の信仰として、家の外にポストみたいなのが置いてあり、そこに精霊をお供えする習慣があることがわかった。
- ・家の造りの特徴は、太陽の動きに合わせて、家を高くして下の空間を作ること、お昼はこの地階の空間で家事やハンモックでのお昼寝などをして快適に過ごせる。また、この空間は牛車やバイクの置き場所としても機能しており、農家が約80%を占めるカンボジアでは重要な役割を果たしている。
- ・業務の際に、何件か家にお邪魔させてもらったのだが、家庭ごとに太鼓の楽器や牛車の模型などを作成していて、それをマーケットで売ることによって収入を得ていることがわかった (写真2)。



写真2. 太鼓を作っているようす

その他にも、水の働きや遺跡の神話、エコビレッジの問題点など建築様式以外にもいろいろ学べたことはカンボジアという国を知るうえで自分にとってプラスになりました。

業務をしている上で感じたのですが、村の人は、見知らぬ私たちが勝手に家に訪問しても温かく出迎えてくれて、フルーツや食べ物をくれたりして、2週間で出会った人たちも含めてカンボジアの人は温厚な方が多いなと思いました。また、業務中にボートに乗れたり、観光客は入れない所に入れたりなど、貴重な体験もたくさんできました。

業務は夕方には終わるので、夜は基本的にフリータイムです。夜は皆でご飯に行ったり、ナイトマーケットという店が集結している所で値切り大会をしたり、マッサージに行ったりしていました。ご飯は2週間で中華（写真3）、ベトナム料理のホー、カレー、カンボジアの家庭料理のアモック、日本料理、ラッキーバーガー、スムージー、アイスなど沢山食べました。安くて量も多く本当に美味しいです。お気に入りのレストランは、タイガーカフェとブルーパンプ



写真3. 麻婆豆腐の辛さは忘れません

キンです。タイガーは外れなしの定番のお店だと思います。ブルーパンプキンはカフェなのですが、アイスが1スcoop 1.5ドルで食べられ、おまけにワッフルが香ばしいです。両方とも日本にできれば繁盛すると思うのですが…。最終日のお昼ご飯では西バライのお店に行ってチキンの丸焼きと、カエルの丸焼きと、アリの入った野菜をつけて食べる調味料を食べたことは、今となってはいい思い出です。マッサージも一時間で5ドルととてもお得ですごく丁寧にやってくれます。

最終日は贅沢して高級ホテルでフェイシャルマッサージをやりました。その他にも、公団の方と一緒にバレーボールをしたり、孤児院を訪れて子どもたちと折り紙や大縄跳びをして遊んだり、サンセットを見に行ったりして、オンオフの切り替えをしていました。

この2週間の業務を通して学んだことは、公団の方は世界遺産保護のために水の管理や遺跡の修復、森林やアンコールタウンの保護に力を入れているということです。特に水の管理については、農業が発展しているカンボジアにとってすごく重要ということを何度も聞きました。最近新しいウォーターゲートができ、将来的には東バライにも水を循環するとのことでした。また、個人的に「観光政策」に興味があったので聞いてみたところ、アンコールゾーンを保護するためにエコビレッジを作ったが、シュムリアップ市から遠い、マーケット、病院、学校が少ないなどの理由からうまく機能していないため、たくさん課題が残っているということもわかりました。エコビレッジはホームステイができるということで、そのことを宣伝して安い予算で1日ホームステイ体験などを観光客に提供すれば、もっとエコビレッジについて知ってもらえるのではないかと個人的に考えました。観光客目線から見て、自給自足をして営む暮らしを見ることはすごく貴重なことだと思うからです。遺跡の修復に関しては、修復の限度の是非は難しいですが、あまりに綺麗に修復しす

ざると、やはり元々の良さが失われてしまうのであまり良くないと感じました。

さらに、個人的にタケオ寺院の階段は急で危ないので、手すりをつけられないのかなと感じました（写真4）。もしくは監視員を置いて観光客の安全の配慮に気を配るなどが必要ではないかと思います。



写真4. タケオ寺院の階段

業務に関して欲を言えば、もっと観光政策の事について学びたかったです。次に訪れる際にはプノンペンにも行って、街並みや村の生活の様子などをシュムリアップ市と比較できたらいいなと思っています。この2週間で自分の目標は達成できたと感じています。また、私は旅行会社に就職したいと思っているので、就職できたらカンボジアの良さを多くの人に伝えて、観光客の増加に貢献できたらなと思いました。自分も最初は正直カンボジアのことを全然知らずに行ったため、絶対すぐにホームシックになるだろうと思っていましたが、たくさんの自然と遺跡と水に囲まれ人も温厚で、この2週間でカンボジアが大好きになりました。次の目標ができたので、来年絶対また行きたいと思います。

運転手のペンさんをはじめ、副総裁のプーさん、公団の職員の方、塚脇先生、絵美さん、広報の廣田さん、埼玉大学の人たちには感謝の気持ちでいっぱいです。正直慣れない土地で、生活上の不安も大きかったです。先生のサポートやチューターの絵美さんのおかげで大きな病気もせず元気に過ごすことができました。

ペンさんには毎日送迎をしてもらい、毎日あの笑顔で私たちを癒してくれて業務に行くのも全然苦ではありませんでした。公団の方は皆個性的で面白くて、でも業務の時は真剣に仕事をしていてメリハリがついた良い職場だと思いました（写真5）。特にじゅんちゃんはお気に入りです。絶対また会いに行きたいと思える方々でした。



写真5. クメールハウスで担当スタッフと

日本に帰って友達にお土産話をしても、私の話を聞いてカンボジア一度行ってみたい!という声が多数です。このように各国の観光の良さを多くの人に知ってもらうのが私のやりたいことだと改めて実感しました。本当に2週間ありがとうございました。

4) カンボジアと私

理工学域環境デザイン学類2年 田原綾女（グループ2）

「初めての海外がカンボジアで良かった」と私は心から思う。このプログラムに参加しようと思い、本当に行動に移し、カンボジアの地に降り立つまで不安と緊張、そしてワクワクでいっぱいだった。

このプログラムに応募したきっかけは、大学生活をもっと充実させたい、環境デザイン学類生としてアンコール遺跡群を一度でも見ておきたい、自分の英語力を試したい、というのが主な理由だった。

この旅は、最初から衝撃的だった。まず、シェムリアップ空港の飛行場に、飛行機から、まるでハリウッドスターのように直接降りたのである。それは、また、気候は夏の日本と変わらないジメつとした感じであったと思う。

業務が始まる前日、みんなでシェムリアップを車でぐるりと回り、だいたいの雰囲気を感じ取った。その日にさーっと見て日本と違うな、と感じたことは、高い建物が無い、モーターバイクに無防備にそしてたくさん乗っている、道路のアスファルトが茶色くなっている、道路がボコボコしている、何かを凝視している人が多い、暑いのに長袖を着ている人が多い、特に女性の中にはサンダルに靴下を合わせている人もいる、接客がありえない、野犬が多い、つるが巻きついている木が多い、何に関しても偽物らしきものが多い、子供が働いている、やたら「カワイイネ」と言われる、たくさんのゴミが至る所に落ちている、時間がゆっくり流れている…などなど。あげたらきりがなく、初日は特に、ほとんどマイナスなところしか目につかなかった。本当に、本当にカルチャーショックの連続だった。今まで、テレビや本などでしか見たことのない光景を次々に目にして驚き、同時に、本当にまだこんな国があるのか、とひしひしと感じた。

月曜日にアプサラ公団でのインターン業務が始まった（写真1）。公団の人はサンダル出勤で、制服を着ている人もまばらで、日本に比べてゆっくり、ゆったりマイペースに仕事をしている印象を受けた。その雰囲気と、スタッフの皆さんが温かく、そして優しく接して頂いたおかげで、初日からガチガチになることなく、自分もまるでカンボジア人のように（とても良い意味で！）自由に学び、業務をこなす事ができた。



写真1. 初日にホテルにて

業務は、毎日が新しい発見で、学ぶべきところばかりだった。主に、業務には、スタッ

フの方の運転するモーターバイクの後ろに乗って（写真2）アンコール遺跡群や、北バライ・西バライなどの貯水池（写真3）やウォーターゲート、市民が暮らす村や民家（写真4）などを視察する外でのアクティブな業務と、オフィスで専門的な事をスタッフの方から学んだり、ディスカッションしたりする”STUDY OFFICE”と二種類あった。外への業務では、色々な所へ連れて行って頂いた。遺跡では、アンコールワット、アンコールトム、ニャックポワン、タプロームなどなど。どの遺跡も、壁という壁に細かで繊細な彫刻が施してあり、全て人の手で造ったと思うと気が遠くなるような、感心しかできないような気持ちで見えていた。スタッフの方に壁画の意味や、遺跡の造りや、造られた背景などを教えてもらった後、ホテルに帰って、主に遺跡などについて学んでいたチームの仲間に、より詳しくレクチャーしてもらい、ノートにまとめてフィードバックや予習を自主的に行ったりした。「ただ見て回るだけではもったいない」と強く感じたからだ。できるだけたくさん吸収したかったのである。そのノートは今も大事に持っているが、たくさん撮った写真と同じくらい思い出のものだ。また、ニャックポワンという北バライ貯水池の真ん中にある遺跡では、一般の観光客は立ち入り禁止のところまで入れて頂き、アプサラ公団の一員として業務を行って来て良かったな、と心から思えた瞬間であった。

“STUDY OFFICE”では、伝統的なクメール建築について学んだ。環境デザイン学類生として非常に興味深く、日本にある家屋の建築様式しか見たことのなかった私には衝撃的だった。しかし、その地その地の環境にあった建築様式があり、クメール建築も、日本家屋もその地ではベストであ



写真2. バイクから見上げた空



写真3. 北バライのニャックポアン遺跡



写真4. 庭で遊ぶ子供たち

るのだと教えていただいた。こんな家にどうして住めるの？と思ってしまった自分がとても恥ずかしい瞬間だった。

オフィスでの業務以外には、市内のオールドマーケットやナイトマーケットなどに買い物へ行って、値切ったり、市民の生活の様子を観察し、帰りはトゥクトゥクに乗って帰る…といったような楽しく刺激的な毎日であった。

このように、2週間、充実した毎日を送り、新しい事や、日本に居ては絶対に分からなかった事を、学び、自分のものにすることができた。この旅が終わった今でも、「楽しかった」という感情だけでなく、「この経験を何かに活かしたい」と思っているという事が何よりの証拠である。

最後に、今回のプログラムの成功はすべて、塚脇先生初めチューターの絵美さん、運転手のペンさん、そしてアプサラ公団のスタッフの皆さまのおかげです。心から感謝しています。

5) アンコールインターンシップ報告

人間社会学域経済学類 3 年 辻 昌希 (グループ 3)

高校のときにカンボジアについて取り上げているメディアを見てカンボジアに興味をもった。いつか行ってみたいという想いはあったが、何を目的に行くのか明確ではなかった。大学生活の中で地域の子どもたちと関わる機会があり、しだいに日本の子どもだけでなくもっと視野を広げて世界の子どもたちと交流したいと思うようになった。カンボジアの知識や訪問の経験がないため不安であったが、学校主催のインターンシップであれば安全・安心であると考えアンコールインターンシップを志望した。

インターンシップに参加する前はメディアなどでしか得た情報しかなかったので、カンボジアは戦争で地雷が埋まっており、とても貧しい国で学校に行けない子どもたちがたくさんいるという勝手なイメージをもっていた。小学校や孤児院にいても遊ぶものもなく不自由しているのかと思っていた。そして、インターンシップを通してカンボジアで暮らす人々の現状や問題などを調査し、日本の産業やライフスタイルなどと比較したいと考えていた。また、現地の人と交流することで、カンボジアの遊びや学びの実態を体感するとともに、日本の文化や遊びを伝えたいと考えた。

アプサラ公団では私は西バライを担当した。初めは自己紹介をするだけで緊張し表情もかたく、アプサラの人とコミュニケーションをうまくとることができなかった。

業務 1 日目は西バライのウォーターゲートの堤防に植林している現場へ行き、一本植えさせてもらった。2007 年にインドが水を増やすために堤防の木をきったことによって、土壌は弱くなり浸食が進んだ。そのため 2010 年から修復を行っている。2 日目にはその修復が施された場所に行ったが、以前の草が全く生えていない状態の写真に比べ草が生い茂っていた。修復には、1) ダムの修復、2) 木、植物の修復、3) 考古学、4) 観光事業、の 4 つのステップがある。3 日目、4 日目にはアンコールワットやアンコールトムのバイヨンへ行った。他の遺跡に比べ大きく、壁には神話が描かれておりその説明を英語で聞き取ることが難しかった。ただ水をためるためにダムの修復が必要なのではなく、遺跡を守るためにも水が安定して流れることが重要なことだと学んだ。

5 日目、6 日目は西バライではなく北バライ、南バライへいった。北バライ中央祠堂のニャックボワンへいき、通常は観光客だと中に入れないところまで入れてもらい水が地下から流れてくるシステムなどを学習した。南バライのロレイ・バコンの寺院へも行った。南バライは西、北バライと違い水がなく川から水を流しており、村の人は水を川の水からだけで賄えるのか疑問に思った。8 日目に行ったタ・プロム遺跡は石の上に木が生えており信じられない光景だった。遺跡を守るためにはそのままの形で残すことはもちろんだが、木をカットするなどある程度人が管理することが必要なのだと分かった。また、7 日目に西バライのメボン寺院へ行ったが北バライと違い、メボン寺院へはボートでなければ行け

ないし、寺院は修復中で形がなかった。現在も毎日水を抜く作業をしており、もし西バライのメボン寺院もニャックポワンのように観光地になるならば、ボートを増やしたり、西バライへ行くまでの道の舗装をしたりすることなども必要だと思った。

今回の業務でウォーターゲートを何か所か見たが、どこから水が流れてきてどこに流れていくか水のプロセスを学習した。日本のように堤防や水門は強度が強いものではなさそうだが、人工的に水を調節して供給することがいかに人々の生活や遺跡に重要なのか間近で感じる事ができた。そして、公団の人と水が流れるプロセスや西バライの事業などのディスカッションを行った（写真1）。西バライは南北 2.2 km、東西 8 km と大規模で、西バライの貯水はシェムリアップ川からビッグウォーターゲートを通り、運河を通り西バライのウォーターゲートで調整して貯水される。山で木が切られると水がなくなり、北バライにも水がたまらず、西バライまで水が流れてこなくなることを知り、水を安定してためることは容易ではないことが分かった。



写真1. サックさんとのディスカッション

また、雨季と乾季があるため雨季には修復できないところもあり、修復が終了するには時間がかかることが分かった。今回は雨季だったため水がたまっていたが、乾季の水の供給システムや村の人々の水の調達方法などの様子を見てみたい。主な業務は水についての学習と観光事業について考えることであったが、日本の水システムなど詳しい知識がなかったためディスカッションで日本のシステムの説明などできなかったことが心残りである。

業務以外の経験として、1日目にオールドマーケットへ行ったが、日本にいるときは値引きすることが日頃ないので、初めはお店の人に圧倒されてしまった。驚いたことはなによりも安いことである。サンダルやズボン、Tシャツも3ドルで買ってしまうのは日本ではあり得ない。中でも私が気に入ってるのは“I♥cambodia”のお店である。フェアトレードのお店で、しおり、コースター、筆箱、ランチョンマットなど畳のような素材の小物がとてもかわいいお店である。オールドマーケットお店の多くはTシャツやズボン・短パン、かばんなどのお店で、その他にもアクセサリーや小物系のお店もいくつかあった。ズボンや短パンは象の柄がかかれており、色もデザインも豊富だったのでお土産には最適だった。初めは値下げすることができなかったけど、段々値段交渉できるようになり買い物が楽しく感じるようになっていった。

また、ナイトマーケットでは最終日にネイルをしてもらった。5ドルでとてもかわいいネイルをしてもらい満足だった。マッサージにも行きクメール式マッサージを7ドルで体験した。ネイルやマッサージは日本では5千円以上かかるもので、容易に行けるものでは

ないため嬉しく感じた。

食事の面ではカンボジアに行く前は心配なところもあったが、毎日おいしいものを食べることができた。中華のお店のチャーハンはとてもおいしかった。中華以外にもレッドピアノでパスタやピザを食べ、タイガーカフェでトースト、フォーのお店の料理もおいしかった。また、ラッキーモールというスーパーにあるラッキーバーガーはボリュームもあり手軽に食べることができたので週2回は通っていた。主食以外のデザートではラッキーモールの中にある1カップ1ドルのアイスクリーム、ブルーパンプキンのアイスクリームは手頃で何度も食べた。泊まっていた向かいのソッカホテルのカフェでスムージーを飲みながら友人とお話し楽しい時間を過ごした。アイスクリームもスムージーもパッションフルーツ味がさっぱりしていておいしかった。

現地ではマンゴー、マンゴスチーン、ドラゴンフルーツ、ココナッツ、ドゥリアンなど様々なフルーツを食べた。なかでも衝撃を受けたのはココナッツである。日本にもココナッツ味のお菓子などを食べたことがあるが、その感覚で生のココナッツを食べると水のようになくて驚いた。他にも公団の人が木になっている果実を食べさせてくれたが、どれも見たことのないものばかりだった。全体的に食べ物の味は甘く感じたが、2週間たくさんおいしいものが食べられてよかった。

カンボジアを訪れるまで、カンボジアではバレーボールが盛んなスポーツだとは知らなかった、公団の人は17時になると近くにあるバレーボールコートへ移動し毎日バレーをしていた。メンバーの笠井さんと一緒にバレーボールの練習に混ぜてもらった。一緒にバレーボールをするまでは業務でしか公団の人と会うことがなかった、公団の人との距離が遠く感じていた。しかし、一緒にバレーするようになり言葉は通じなくても、プレイで笑いが起



写真2. バレーメンバーとの記念写真

きたり、得点が決まったらみんなで喜んだりすることで自然に公団の人との距離を縮めることができた気がした。最初の自己紹介のときにバレーボールが好きですとアピールしてよかった。そして、公団の人たちは毎日みんなで集まりバレーをしていて、ほんとにバレーが好きなのだと伝わってきた。ゲーム中もアタックを打たせようと私に何回もトスを上げてくれたり、「ナイスプレイ」と言ってくれたり公団の人の温かさを感じた(写真2)。

孤児院を訪問できたら、おりがみ、シャボン玉、ビーチバレー、なわとびなど、日本で小さい頃に遊んだ遊びを教えたいと思っていた。自己紹介をしたあとに用意してきたお土産を出すとみんな元気に遊びはじめ、全部あっという間に子どもたちの手元にわたりとても嬉しく感じた。大縄を片足で跳んだり、折り紙で鶴をおっていたり、ゴムでゴムとびを

はじめたり、風船、ビーチバレーでみんな楽しそうに遊んでいた。ビーチバレーもバレーを教えようと思って日本からもってきたけれど、子どもたちはブロックを飛んだりして本格的で驚いた。日本では孤児院と聞くと重くとらえられ、子どもを刺激しないようにいろいろ気を付けなければならないが、カンボジアの孤児院では村や街の子どもと変わりなく明るく私たちに接してくれたので、日本の子どもと遊ぶくらいにありのままの自分で子どもたちと関わることができた。

休みの日にトレンサップ湖へ行き遊覧船に乗った。湖はとても大きくて水の上に家、学校、店などがあり人々が水上で生活している様子は驚きだった。観測地点までいくと周りに何もなくてとても静かで落ち着いた。また、ソッカホテルの隣にあるホテルのプールへ行きみんなで休日を楽しく過ごした。プールはきれいだったが、水は鉄分が多くのが痛くなった。

プラカーンやバンテアイスレイの遺跡へも行った。どこの遺跡へ行っても子どもの売り子が「ブレスレット1ドル」、「ポストカード10枚で1ドル」など声をかけてきたが、どうすることもできなくて、どんな風に子どもたちに接すればよいか分からなかった。バンテアイスレイは一番きれいな寺院とよばれているとおり、他の寺院に比べヨーロッパ風になっていた。多くの遺跡が日本やインド、ヨーロッパ諸国と連携して修復しているのを見てバンテアイスレイのようにきれいに整備されることは良いことだが、その遺跡の歴史や魅力、カンボジアの人々の意見などを第一優先に考えて修復されることが重要だと感じた。

このインターンに参加するまでは子供と交流したいという想いが強かったが2週間、水部門での業務を通してダムや貯水池、川などに興味がわくようになった。日本のダムを訪れカンボジアのダムと何が違うのかなど比較したいと思った。そして、一番痛感したのはやはり英語を話せないことだった。もっといろんなことを教えてほしい、もっと日本のことを伝えたいと頭では考えていても、言葉で表現することができずとてももどかしい気持ちだった。業務のときも単語が分からず辞書が手放せない状態だったので、公団の人たちには申し訳ない気持ちになった。これからどんな場面で英語を使うか分からないが、今回感じたもどかしくて、悔しい気持ちを糧にこれから英語を少しずつでも勉強していきたい。

また、経済の観点からみると格差の問題では80%は貧困層であると分かったが、もっと詳しい格差の現状や産業、雇用など調査したいと思った。日本が少子高齢化に対し、カンボジアでは人口の増加が進んでいる。そのような社会現象も関心があるので調べたい。



写真3. 村の子どもたちの素敵な笑顔

この2週間のインターンシップを通してアプサラ公団の方々、ドライバーのペンさん、チューターのえみさんには大変お世話になり感謝の気持ちでいっぱい。毎日が濃く、日本では絶対経験できないことがたくさんあり、人の温かさを感じた2週間だった（写真3）。

6) インターンシップに参加して

医薬保健学域保健学類 2 年 富田風華（グループ 3）

私は8月下旬から9月上旬までの2週間、カンボジアのアンコール遺跡整備公団（アプサラ公団）のインターンシップに参加させていただきました。私がこのインターンシップに参加しようと思ったきっかけは、前期に自分が履修していた「公衆衛生学」についての講義と関係があります。私はこの授業で、周りの環境がいかに人の健康へ影響を与えるか、ということ学びました。そんなとき、このインターンシップのことを知りました。そして、アプサラ公団は人が住んでいる世界遺産をどのように管理し、人々の生活や健康にどのような影響を及ぼしているのか、とても興味を持ちました。インターンシップに参加することで、日本以外の公衆衛生の現場を見てみたいと思い、応募しました。参加できることが決定したときはとても嬉しかったのですが、今まで医薬保健学域からの参加者はいなかったのも正直不安もありました。しかし、渡航までの2回の説明会などで他の参加者と顔合わせができ、不安は少しずつ解消されていったと思います。



写真 1. 西バライ

飛行機で日本から韓国経由でカンボジアに移動し、月曜日から実際に業務が始まりました。アプサラ公団の業務は、遺跡の保全修復、遺物の展示、地域文化の保存、環境の保全、観光開発、と多岐にわたっています。私は西バライ貯水池の水環境整備事業に参加させていただきました。西バライとは、アンコールトムの西に位置する巨大貯水池のことです（写真1）。東西に 8.8 キロメートル、南北に 2.2 キロメートルの長方形の形をしており、5,600 万立方メートル以上の体積があります。アンコール地域には 4 つの貯水池がありますが、水が入っているのは西バライと北バライのみです。初日の午前はこの西バライに行って、公団の方から説明を受けました。西バライの周りは堤防になっていますが、この堤防はひどい浸食が進んでいたため今は木や草を生やして修復をしています。そこで私たちも植



写真 2. 西バライでの植林のようす

林させてもらいました（写真2）。鍬を持つのもやっとでしたが、地域の人にも手伝ってもらって無事植林することができました。気温は30度を超えるなか地域の人はずっと植林しており、機械も使ってなかったので大変そうでしたが、どの人も笑顔で私達を受け入れてくださってとても嬉しかったです。午後はオフィスに戻り、西バライについてもっと詳しく説明を受けました。西バライの問題を解決するには、1）堤防の修復、2）木を植え直す、3）考古学的な発掘、4）観光事業への取り組み、の4つのステップがあることが分かりました。「なにか意見はないか？」と聞かれたので、「日本では植林するとき太く成長した木を植えるが、今日自分が植えた木は細かったので大丈夫か？」と伝えたところ、「コストがかかるため、細い木を植えているが強さはあるので大丈夫だ」と返ってきて、政府にお金のないカンボジアと先進国としての日本との違いを感じました。毎日の業務は、午前は外へ出かけて現場を見て、午後はオフィスでディスカッションというように進んでいきました。公



写真3. タプローム寺院

団の人たちは西バライだけでなく、アンコールワット、アンコールトムなどの遺跡にも連れて行ってくださり、遺跡にまつわる神話や歴史を教えてくださいました（写真3）。また、他のグループと一緒に業務をすることもあり、自分のグループについてだけでなく、他のグループが何をしているのか交流することもできて良かったです。業務を行う上でつらかったことは、英語でうまくコミュニケーションがとれなかったことです。自分がもっと英語を話せたら、もっと伝えたいことや聞きたいことがあるのにな、と何回も思いました。しかし、うまく英語を聞き取れなくても、公団の人たちはジェスチャーや絵や辞書などを使って根気よく伝えようとしてくれたので、理解することができました。公団の人たちの優しさをたくさん感じました。

また、私が看護を専攻していることを考慮してもらい、病院見学をさせていただきました。塚脇先生やプー副総裁、連れて行って下さった公団の方にはとても感謝しています。見学させてもらった病院はアンコール小児病院で、日本人の方が設立した病院です。医療費は無料で、払えない人には交通費も支給され、すべて寄付で成り立っていると知り、とても驚きました。カン



写真4. アンコール小児病院

ボジアには保険制度が存在しないため、他の地方の病院では全額負担しなければならないのが現実です。そしてこの病院に来る子どもたちの一番の死因は肺炎です。日本では普通に治る病気がカンボジアでは死につながります。日本の医療しか知らなかった私にとっては衝撃的でした。この病院では最新の高度な医療を提供しているので、技術は日本と変わらないと思います。しかし、他の病院では医師や看護師が足りず、十分な医療ができていないことも知りました。せつかくきちんとした医療を提供できるこの病院があるにも関わらず、そこにたどり着く前にもう手遅れの状態になってしまうことが多いそうです。子どもは国の未来を作っていく大切な存在だから、もっと守っていける制度ができてほしいと思いました。

休日はトレサップ湖に行って、日本では見ることのできない水上生活を実際に見たり、ディナーショーでカンボジアの伝統的な踊りを見たりと、カンボジアの文化に触れることができました（写真5）。マーケットでは、「値切り」を経験することができて楽しかったです。



写真5. トンレサップ湖

このインターンシップを通して、カンボジアの人々や文化に触れ、カンボジアの良さを知ることができました。また、日本の良さも改めて感じることもできました。そ

れは、道の整備具合、食べ物の衛生面など、日本の技術を誇らしく思う場面が結構あったからです。そして、もっと自分の国について知っていなければならないと思いました。今回学んだことをうまく生かして、これからの自分の学習につなげていきたいです。特に私は、病院見学で見たこと聞いたことを忘れずに日本の医療、世界の医療について勉強していきたいです。

このインターンシップで貴重な経験をさせてくださった、大学関係者のみなさま、公団関係者のみなさま、塚脇先生、チューターの絵美さん、メンバー、そして快く参加させてくれた家族には本当に感謝しています。ありがとうございました。

7) アンコールインターンシップに参加して

人間社会学域地域創造学類 3 年 村井芙美加 (グループ 4)

8 月 25 日から 9 月 7 日までの 2 週間、カンボジアのアンコール遺跡整備公団にて行われたインターンシップに参加した。公団の方々や現地でお世話になった人々、カンボジアのアンコール遺跡で暮らしている人々などたくさんの人と出会い、様々なことを学んだ。

アンコール遺跡群は、世界遺産の中で現地の住民が生活を営むという特殊な地域形態であり、それは私の出身地である岐阜県の白川郷を含め世界で 2 ヶ所だけである。白川郷では文化と観光業の共存がうまくいっておらず、本来貴重な文化を守るために指定されたはずの「世界遺産」というブランドが観光業の文化への侵食を推し進めるといった悪の要素となっているのが現状である。私は、地域創造という自身の専攻の視点から文化とビジネスの共存の手がかりを見出せないかと思ったのがこのインターンシップに参加しようと思ったきっかけである。

私たちのグループは、ルン・タ・エク・エコビレッジを担当した。近年、アンコール遺跡の開発や観光地化が進み、世界遺産に指定されているエリアの人口が増加し、環境汚染や遺跡や文化の崩壊、郊外の過疎などが問題となっている。そこで、都市部の人口増加を防ぐためにアンコール遺跡群の郊外に作られたのがルン・タ・エク村である (写真 1)。新しく住む人には政府が無料で家を提供し、観光客にはカンボジアの暮らしを体験できるホームステイの制度も検討されている。さらに、この新しい村を環境に配慮した「エコビレッジ」にしようとしている。必要な電気は太陽光パネルで生み出し、風車を使って湖から水をくみ上げ各家庭に給水する。農業に使う肥料も化学物質を使わないように配慮されている。

しかし、現在のルン・タ・エク村は住民が思うように集まらず、とても閑散としている。私が最初にルン・タ・エク村を訪れた時は、きれいな家がきっちりと並んでお



写真 1. ルン・タ・エク村にて



写真 2. 整備された畑

り、風車と湖の景観はとても美しく、畑にはたくさんの種類の食物があり（写真2）、アンコール遺跡内とはうってかわってカラフルで、とても住みやすい場所だと思った（写真3）。しかし、村を視察しているうちに、そこに住む人の少なさと村の静けさに違和感を感じた。

ルン・タ・エク村に住民が集まらない理由はたくさんある。まず、当然であるが都心から遠く、村まで行く道が舗装されておらず大変険しい。さらに病院や市場がなく、学校も十分に機能していない。インフラの整備も不十分である。さらに、ルン・タ・エク村での仕事は農業しかなく、それもルン・タ・エク村の土壌は農業に向いておらず、広範囲・大規模な農業は難しいため、ほとんどが自給自足するための村内で消費する作物であるので、仕事をしてもお金が入ってこない。それから、観光地としてアンコールワットやアンコールトムなどといった有名な遺跡に勝る魅力的なものもなく、バスなども通っていないため観光客がルン・タ・エク村に訪れることはほぼない。

このような状況を理解したうえで、ルン・タ・エク村に住民や観光客を集めるにはどうすればいいかと意見を求められた。私たちはまず、ルン・タ・エク村まで行く道の舗装や交通網の充実を訴えた。私たちがルン・タ・エク村に視察に行くときはバイクに二人乗りで行くのだが、舗装されていないガタガタで細い道を1時間ほどかけて往復するのはかなり大変であった。これではまず観光客が村に行くことも難しいだろうと思って提案したが、コンクリートなどで舗装するとトラックなどの往来で大気が汚染されたりすることが懸念され、「エコビレッジ」の概念から外れると仰っていた。発展と保全の妥協点を探し明確にすることが必要である。学校や病院、市場の充実、農業の発展などについても、多くの資金が必要な問題であり、長い目で発展に向かって尽力していくことが大切である。

さらに、私たちは経済がその村だけで終結してしまっていることに問題を感じた。その村で作ったものを、消費するのではなく他の場所で売らなければ経済は発展し得ない。できることならばルン・タ・エク村に不向きな農業でなく、他のことで何かするべきと考え、衣類やアクセサリ、草履や帽子、食器などを村で作って外部で売るということを提案した。さらに、そういった物の作り方を教える指導者を村に派遣して就業訓練ができるシステムを構築することも同時に提案した。ルン・タ・エク村は主に若年層を対象としているので、若い人が農業だけでなくいろいろな職を選べるようにすることはとても効果的であると思う。

観光地化については、ルン・タ・エク村は景観や雰囲気はとても素晴らしいものであるので、それを生かした観光地づくりが必要であると思う。さらに、ただホームステイする



写真3. 風車と湖

だけでなく、例えば遺跡までのガイドがあったり、クメールの民族衣装を着たり伝統料理作りが体験できたり、持ち帰りできるようなお土産を自分で作ることができたりなど、そういった付加価値をつけ加えることを提案した。そして、何よりも観光客にルン・タ・エク村を知ってもらう広報活動を強化することも提案した。

このような対話を通して、ルン・タ・エクの政策は思った以上に大変であると感じた。人の生活に関わる問題であるので、それがいいと思う人もよくないと思う人もいるため、妥協点を見出すことは困難であるし、人々の生活に急激な変化をもたらすことなく段階的な開発が理想である。どの政策をするにも莫大なお金と時間がかかるが、ゆっくりとでも生活が豊かになっていくといいと思う。

この2週間のインターンシップは、今後の自分の糧になるものを本当にたくさん得ることができた。私は将来公務員になって人の生活に関わる仕事をしたいと思っているが、今回文化も価値観も違う海外で村づくりの仕事に携わり、住民に真摯に向き合う公団員の方や、日本とはかたちの違う「幸せ」を持った現地の人々に出会い、自分の将来像がくっきりとしたものになった。最後に、カンボジアの発展を願うとともに、今回のインターンシップで出会ったすべての人に心から感謝しています。本当にありがとうございました。



写真4. 村の子どもたちと

8) アプサラ公団でのインターンシップを終えて

理工学域物質化学類2年 島村陽恵（グループ4）

私は8月26日から9月6日の10日間、カンボジアのシェムリアップにあるアプサラ公団のインターンシップに参加した。参加を志願した理由は、日本では内戦や地雷の印象が強いカンボジアという国が実際どのような場所なのか知りたいと思ったためや、職業について自分の考えを深めたかったため、海外で活動することで自分の視野を広げたかったためである。アプサラ公団とは、カンボジアが誇る世界遺産アンコール・ワットの整備・維持管理を担当している国立公団である。私はそこで、公団が取り組んでいる4つのプロジェクトのうち、遺跡外に新しい観光地をつくる、ルン・タ・エクビレッジプロジェクトの業務に参加させていただいた。ルン・タ・エクビレッジプロジェクトとは、遺跡公園内に集中している人口を緩和するため、新たな村を遺跡外に設立し、そこに人々を住まわせ、観光客がカンボジアの伝統的な生活スタイルをそこでホームステイするというかたちで体験できるような、新たな観光地にするというものである（写真1）。これにはエコビレッジといってエコに配慮した村づくりというコンセプトも両立している。

私はルン・タ・エクビレッジがある場所へ公団スタッフの方々に連れられて訪れた時、この一見画期的なプロジェクトの難しさを知った。一番の問題は立地で、ルン・タ・エクビレッジは町はずれに位置しており、そのような不便な村落に人はなかなか集まらないのである。村は閑散としていて今ある建物は住宅と小学校のみ、イン



写真1. ルン・タ・エクの住宅棟

フラの整備も進んでいない状態であった。私は業務にあたって、日本人の目線で、道を舗装して市街地から車で行きやすくすればよいのではとか、バスなどの公共交通機関を発達させて市街地と村をつながりやすくしたらどうかなど、いろいろと提案してみた。しかしどれも車の排出ガスが大気汚染を招きエコビレッジの信条に反するとか、バスはカンボジアでは時間通りにくることがないため誰も利用したまらないなどといって却下されてしまった。そこからプロジェクトの、あくまでカンボジアのやり方で、“エコ”に進めなければならないという一筋縄ではいかない側面もみえた。

正直なところ、今の村の現状では目標である旅行客のホームステイにはほど遠く、それにもかかわらずエコにこだわって村づくりが進まないといったことに少し先が思いやられた。しかし、住居は伝統的な高床式でまだ建てられて日が浅いこともあり真新しくきれい

で、村の中央にある貯水池からの風車とその奥に並ぶ住宅の眺めはとても美しく、旅行者にぜひ見てもらいたいものであるということ間違いなかった。またカンボジアの国のことをよく分かっていない私たちの意見にも真摯に耳を傾けてくださったスタッフの方々の、プロジェクトに対する熱意が非常に強く感じられ、日本とは全く考えもやり方も違い少し遠回りにさえ感じる点はいくつかあるが、それでもこのルン・タ・エクビレッジプロジェクトは成功してほしいと心から思った。

それからスタッフの方々が連れて行ってくださった、たくさんのアンコール遺跡群は、どれも圧巻のスケールで当時の繁栄が感じられ、素直に感動した。スタッフの方はとても遺跡に詳しく、どの遺跡についても建てられた年、建てた王、建築者、遺跡に祭られている神々のことまでこと細かく教えてくださった。おかげで私たちもかなり遺跡についての見聞が深まった。そして私は彼らの知識量から仕事に対するプロフェッショナルな一面を見、とても尊敬した。仕事への姿勢はこうあるべきだと見せられた 10 日間だった。



写真 2. アンコール遺跡で説明をうける

スタッフの方たちとのやり取りの上では自身の英語力の乏しさに苦心したが、身振り手振り、時には筆談で伝えあい、なんとかコミュニケーションを成立させることができた。反省するところは英語に自信がないからといって聞きたいこと、言いたいことをなんでも口にできなかったことである。日本人が英語を苦手になっている原因であるところづく痛感した経験でもあったが、外国の人と意思を交わすとき、言葉の壁を生み出しているのは自分の意識なのではないかと気づかされた時間でもあった。また現地のクメール語をスタッフの方から少し教えていただいたが、それを使って村の人たちとわずかながらに言葉を交わせたときの喜びはまた想像以上であった。日本で生活していて日本語に絶えず囲まれている環境では、この感動は味わうことができなかったと思う。

私は化学を専攻しているので、将来的には研究職に就きたいと何となく思っていたが、このインターンを通して、その職について考えを改めなおしてみるべきだと分かった。私は以前、物質のもつ可能性を探索し、そこから得られた情報から人の役に立つ何かへと変換されていくという科学研究の過程は、裏返せば少しでも誰かが救われる何かでなくては研究は無意味であるといわれていて、それはとても不自由なことなのではないかと考えていた。けれども公団スタッフの方たちの姿から、自分の専門分野を人のために発揮することへのやりがいと喜びが何にも代えがたい研究への活力なのであるということが分かり、研究の行き先が人のためというのが不自由でもなんでもなく当たり前のことなのだと理解することができた。自分が本当にどのような職業に就くのかはまだ決まっていないが、ど

の仕事に就いても誰かのために尽力できる人でありたいと思った。

最後に、今インターンが無事に終わられたのは、個性的で楽しいインターンメンバーの皆さん、メンバーの身の回りを世話してくださったチューターの絵美さん、企画しどんな時も引率してくださった塚脇先生、そして私たちを快く受け入れてくださったアプサラ公団の方々の支えがあったからであり、そのことに感謝し、この貴重な経験をこれからに活かしていきたい。



写真3. 公団スタッフと

5. チューターの報告：2度目のカンボジア

人間社会学域国際学類4年 笹田絵美（チューター）

今年度はチューターとしてアンコールインターンシップに参加させていただきました。まさか自分がまたカンボジアに行くとは思っていなかったのですが、終わった今、チューターという大役を私に任せていただいたことに、本当に感謝しています。大学生活最後の夏休み、健康で積極的な参加学生のおかげで1日1日が濃く、充実した2週間を送ることができました。

チューターの仕事は主にインターンシップ業務の補助でしたが、私にとっての大きなミッションは日本からカンボジアへ、学生たちを安全に送り届けることでした。大きな責任を感じ、緊張していた私でしたが、無事に全員と元気な状態でたどり着くことができました。現地では、毎朝の健康チェック、業務に行く各グループの管理、毎晩の健康チェックが主な仕事でした。幸い、寝坊をした学生は一人もおらず、毎朝みんなの元気な顔をみることができ、食欲旺盛で活発な学生たちに私の方が元気をもらっていました。各グループが業務に行くときには誰と、どこに行き、何時にどこへ帰ってくるのかを把握し、出発時間と共に記録をして送り出します。夕方には毎日ホテルのロビーでミーティングをし、みんなの表情からも健康状態をチェックします。

各グループを送り出した後、学生たちの業務に同行させていただくことがしばしばありました。去年は私が所属していたチームの担当である北バライに主に行っていたのですが、今年はルン・タ・エクエコビレッジなど、様々なところへ行かせていただき、また午後のディスカッションのときも、グループの学生と一緒に説明を聞く機会をいただいて、幅広い知識を身につけることができました。今年は去年断念したクメール語の勉強にも熱を入れ、また学生と共に英語の資料を解説したりなど、本当に得るものの多い2週間でした。

去年の経験から、おいしいごはんのお店やマッサージのお店を今年度の学生に伝えるのも私の仕事ではあったのですが、学生たちがとても好奇心旺盛だったために新しいお店を開拓し、逆に教えてもらうこともありました（写真1）。来年度の参加学生にも新たにいいお店を見つけて、後輩たちに伝えていってほしいと思います。私は報告会やこのインターンシップの紹介でたびたび言ってきたのですが、シェムリアップにはおいしいものが本当にたくさんあります。中華料理は今年度の学生のお



写真1. お気に入りの中華料理店

気に入りでもあり、私の一番のおすすめでもあります。ぜひ多くの方にシェムリアップを訪れ、遺跡観光はもちろんですが、グルメも堪能していただきたいと思っています。

1年ぶり2度目のカンボジアでしたが、変化している部分も多く見られました。去年全く水がなかった遺跡が今年は水で満たされていて、水がある状態とない状態の遺跡を見ることができたのは私にとって景観を考える上で貴重な経験でした（写真2）。また、オールドマーケットに新しいお店ができていたり、去年あったお店が倍に拡大していたりなど、たった1年しかたっていないのに変化が見られ、これからシェムリアップがどのような変貌を遂げるのかが楽しみです。変化と言



写真2. 北バライのニャックポアン遺跡

えば、ルン・タ・エクエコビレッジもこれからの楽しみのひとつです。ここは、興味がありながらも昨年はいけなかった場所で、今年初めて訪問させていただきました。新しい村で、これから田んぼや学校を作り、観光客を呼び込むために工夫をしていくそうです。まさにこれから変化していくこの村に10年後、ぜひもう一度訪れてみたいと思います。

今年のインターンシップで最も印象的だったのは現地の人とのつながりです。1年ぶりでもあり、去年は同じチームの公団のスタッフとしかほとんど話さなかったにもかかわらず、今年初めてオフィスに行ったときには、多くのスタッフが覚えていてくださり、私に声をかけてくれ、温かく迎えてくださいました。少しすると、業務の後に一緒にバレーボールをするほど仲良くなり、やはりカンボジアにはフレンドリーで優しい人が多いのだと実感しました。スタッフの一人も「カンボジアの人は誰とでも仲良くなれる」とおっしゃっていたので間違いないでしょう。村を訪問した時はご家族が笑顔で私たちを迎え、自由に見学させてくださいました。道を歩いているとトゥクトゥクのお兄さんに常に声をかけられます。市場を歩いているとお姉さんに「オネエサンカワイイネ！」と声をかけられます。観光地だからこそだとは思いますが、その声にいつも笑顔にしてもらいました。日本に帰ってきて道を歩いていると、寂しいと感じるほどです。トゥクトゥクや市場のお兄さん、お姉さんは一度きりですが、この出会いを大切に、公団のスタッフとは一生の友達でいたいと思っています。

あと半年で社会人として働き始め、なかなか海外に行く機会は無くなるかもしれませんが、必ずまたカンボジアを訪れ、シェムリアップの変化、ルン・タ・エクの変化、アンコールパークの変化を自分の身をもって感じたいと思います。最後に、シェムリアップには世界遺産、そしておいしい料理がたくさんあります。ぜひ多くの人に行って、それを感じてほしいと思います。

6. 埼玉大学の海外フィールド実習報告

1) 金沢大学の海外インターンシップと埼玉大学の海外実習

埼玉大学教育学部・准教授 荒木祐二

アンコール遺跡整備公団インターンシップにかかわったのは今回で2度目になる。アンコール遺跡という世界有数の文化遺産において、参加学生たちが遺跡の修復と保全に関する体験をとおして、大きく成長するようすを間近でみてきた。金沢大学の取組みを模範として、いずれは埼玉大学でもアンコール世界遺産における同様のインターンシップ、あるいはフィールドスタディを実現させたいと考えている。この度は、埼玉大学教育学部の片野清夏（大学院1年）と山田晴菜（学部3年）の2名が同行し、金沢大学のインターンシップのアシスタントを兼ねたフィールド実習を実施した。本報告では、ふたりの参加のようすも踏まえて、今年度の活動を振り返りたい。

埼玉大学チームがインターンシップに合流したのは、ちょうど活動の折り返しの時期だった。金沢大学の参加学生全員が、主体的に行動しようとする意欲に満ちていたことが印象的だった。学生たちはすでに公団スタッフたちと打ち解けており、自ら率先し、ときには先導して業務の打合せを行っていた。活動で不明な点が生じれば、まずは各々で熱心に調べたうえでお互いに意見交換をしていた（写真1）。彼女たちの興味はアンコール時代の信仰からカンボジアの医療制度、民家の建築、ゲストハウス近くで食べられるアイスクリームまで幅広く、ふとした疑問が生じては誰かが答えていた。自然発生的につくられた雰囲気だと思うが、所属の異なる学生たちならではのやりとりであり、たいへん興味深かった。

一方で、2週間にわたり8名もの学生の安全を確保するためには、チューターの存在が不可欠であることを改めて感じた。活動全般をよく把握しており、土地勘もあって公団スタッフのこともよく知るチューターの存在が、参加学生たちの心理的負担を大きく軽減したことは間違いない（写真2）。



写真1. 打合せのようす



写真2. チューターの笹田絵美さん（右）

今年度チューターを務めた笹田絵美さんは、参加学生の面倒をみることはもちろんのこと、塚脇氏の発言を支持し、公団スタッフたちにも何気なく声を掛けていた。的確に人選されたチューターが、教員と学生、公団スタッフとの間を取り持つ潤滑油的な役割を果たし、塚脇氏にかかる負担も和らいだことだろう。

そして、毎度のことながら活動全体の安全に対する塚脇氏の配慮には目を見張るものがあった。カンボジア王国の一省庁ともいえるアンコール遺跡整備公団と金沢大学との間で業務提携を結び、互いの信頼が約束されている。この度も公団で訓練されたスタッフを参加学生にひとりずつ割り当て、さらに前述のチューターのほか、大学事務員の廣田氏、現地に精通した私、英語が話せて機転の利く運転手のペン氏らをサポーターとして配置し、万が一の事態が生じても迅速に対応できる体制が何重にも敷かれていた。また、学生たちには一人ひとりに現地の携帯電話を持たせ、宿泊地も食事処もつねに安全で衛生的な場所を選び、野外の炎天下での活動は午前中のみにするなど、学生に過度な負担がかからないような細心の注意が払われていた。そのうえで、学生の個別の要望を安全の範囲内で柔軟に受け入れ、明快で的確な指示を出すことにより、参加学生たちは士気を高めて次の業務に臨めていたと感じる。塚脇氏の熟練された学生指導の手法をぜひとも見習いたい。

埼玉大学から同行した片野と山田は、このインターンシップを間近にみて大きな衝撃を受けたようである。はじめは漠然と付いてきたようなふたりだったが、金沢大学の学生の積極性や逞しさに感化されて、クメール語を進んで覚えるようになり、カンボジアの人たちとのコミュニケーションを楽しむようになっていた。そして気がつけばインターンシップの学生たちに溶け込み、とくに山田はカンフル剤的な役割も果たしていたように見える。

本学のふたりが教員になることを志望していることから、フィールド実習ではアンコール遺跡に加えて教育施設の視察を行った（写真3）。残念ながら、9月はカンボジアの学校が長期休暇中であり、多くの学校が閉まっていた。それでもタイミング良く訪問できた学校において、子どもたちが教室で身を寄せ合って学ぶ様子を垣間見ることができた。教科書や文房具が十分でない環境にあるものの、屈託のない



写真3. ルン・タ・エクでの学校訪問



写真4. トンレサップ湖での家庭訪問

笑顔で「勉強が楽しい」と話す子どもたちに出会ったことで、教育の本質を考えるきっかけになったと思う。学校訪問と並行して家庭訪問も行い、決して裕福とはいえない家庭において、そこに住む人々が生き生きと暮らしている実状を目の当たりにした（写真4）。ここで暮らす普通の子どもたちが観光客を相手に民芸品の売り子をしていることを知り、はじめのうちは観光地で会った売り子たちを迷惑そうに感じていたふたりが、家庭訪問後には売り子たちを勇気づけるような声掛けに変わっていた（写真5）。



写真5. 民芸品を売る子どもたちと

帰国後、国際社会に対するふたりの関心はいつそう高まり、片野は地球規模の環境問題に興味を示すようになり、山田はオーストラリアでの海外インターンシップへの参加を決めた。カンボジアでのフィールド実習がふたりの成長を後押ししてくれたのだろう。微力ながら、今後も彼女らの成長を支援していきたい。

日本の教育界では「生きる力」の育成に躍起になっているが、私の経験上、海外のフィールドに出てこそ、生きるために本来備わっている能力が引き出されると感じている。アンコール世界遺産という著名な海外フィールドで多様な価値観に触れる実体験は、多感な時期を過ごす学生たちの感性を強く揺さぶることだろう。こうした経験は、所属の異なる同年代の学生たちが共同で活動することで教育効果がさらに高まり、参加学生の安全確保の観点からも合同開催が有効であるように見える。今後も、埼玉大学でフィールドスタディを実施する場合は、この金沢大学の海外インターンシップの開催時期に合わせたい。なお、この度の渡航では8月から9月上旬にかけて多くの学校が長期休業中であり、教育施設の視察が困難だったことが課題となったが、アンコール遺跡整備公団の協力を得て解決策を見出した。

末筆ながら、この度の渡航でお世話になった塚脇氏をはじめ、公団副総裁の Hang Peou 氏、その他ご支援いただいた関係各位に心より感謝申し上げます。

2) カンボジアでのインターンシップを間近で見て

埼玉大学大学院教育学研究科教科教育専攻技術教育専修 1 年 片野清夏

今回、私は9月1日から10日までの約1週間、金沢大学の海外インターンシップの様子を見たり、現地での学校教育についてのインタビューなどを行なうためにカンボジアに滞在させていただいた。そもそも、カンボジアに行こうと思ったきっかけは海外にあまり行ったことがなく、海外での生活を体験してみたかったことと、カンボジアという国での教育がどのようなものがあるのか、また、金沢大学が毎年行なっているインターンシップに興味をもったからである。

私たちがカンボジアに到着したときには金沢大学のインターンシップは半分が終了していた。このときすでに、金沢大学の学生さんたちはアプサラの公団職員とスムーズにコミュニケーションをとれていたことにとても驚いた。日本にいる間にインターンシップの様子の報告を受けていたが、実際に職員たちと議論したり質問したりしている様子を間近で見て、インターンシップ自体は2週間という短い期間



写真1. 金沢大学の打合せ

だけけれど、その時間の中でとても成長していけるものなのだと実感した（写真1）。カンボジアに滞在している間、インターンシップに直接関わることはほとんどなかったけれど、学生さんたちが楽しく、それでいて真剣に取り組んでいる様子が印象的だった。また、金沢大学の学生さんたちは今回のインターンシップで初めて出会うという人も多い中、短い期間でとても仲良くなり、お互いに助け合って成長しているように感じられた。

私たちはカンボジアにいる間、アンコールワットをはじめ、ニャック・ポアンやバイヨンなどたくさんの遺跡を見学し（写真2）、その周辺にある生態系について学んだりすることができてとても充実した毎日を送ることができた（写真3）。トンレサップ湖の周辺の家庭に訪問して学校教育についてインタビューしたりすることもでき、その周辺に住んでいる子どもたちがどのような生活をしているのか、どうやって学校に通っているのかなども聞く



写真2. アンコール遺跡の見学

ことができた。また、何校か小学校を訪問してインタビューすることもでき、学校の様子なども見学することができ、本当に充実した1週間を過ごすことができた(写真4)。

今回のこのカンボジア渡航を通して感じたことはカンボジアの生活に対して自分がどれほど偏見をもっていたかということとコミュニケーションスキルの大切さであった。カンボジアに行く前までは、カンボジアはまだ発展途上で危険が多いのではないかと、すごく暑くて大変なのではないかなどのたくさんの不安を感じていた。しかし、初日はとくに周りに注意して過ごしていたけれど、実際にはカンボジアの人とコミュニケーションをとってみると意外に話しやすい人が多かったり、私たちが過ごした1週間は天候も安定していることが多く過ごしやすかったり、確かに日本とは違うことが多くて戸惑うこともあったけれど、その場所なりの常識になれ

てしまうととても過ごしやすい場所であり、1回も来たことがないのに自分勝手に判断していたのに気付く、自分の目で見て、体で感じてみることでその場所を知るためには一番必要なのだと感じた。自分の知らないことが世の中にはたくさん溢れていて、それを知ろうと自分がもがくことで少しずつ自分の世界が広がって行くのだと分かり、カンボジアという国に対して自分がどれほど無知でいたか、そのために偏見をもっていたかを知った。また、日本語の通じない国で自分の拙い英語をどれだけ駆使してコミュニケーションを取るかが最大の課題であったけれど、自分から積極的に自分のわかる範囲の単語や文章力を使えば使うほど、スムーズにコミュニケーションを取ることができるようになった。自分からコミュニケーションを取ろうとすることで意外と相手にも自分の意思が伝わり、楽しく会話したりすることができるということも今回のカンボジア渡航のおかげで知ることができた。

今回のカンボジア渡航は、1週間という短い期間ではあったけれど、内容が濃く自分を新に見直すことができた本当に貴重な経験になった。今回の経験で学んだことを残りの大学生活の中で生かし、また社会に出てからも貪欲に自分の世界を広げることができるように過ごしていきたい。



写真3. 植物調査



写真4. カンボジアの小学校

3) 現地体験の大切さ

埼玉大学教育学部教科教育コース技術専修 3 年 山田晴菜

私は、9 月 1 日から 9 日間金沢大学のアンコール遺跡整備公団インターンシップに同行させていただいた。荒木先生から最初に声をかけていただいたとき、私は一瞬で参加するのを決めた。なぜなら、東南アジアでボランティア体験をした友達がいる、私も大学生でしかできない体験をしたいと思ったからである。もちろん、英語ですら自信がないため言葉の不安や、都心でしか生活してこなかったため文化の不安など、初海外に対する不安は数えきれないほどだった（実際お腹を下した）。しかし私を後押ししたのは、それ以上に大きかったカンボジアへの興味と未知なる冒険の期待感であった。

現地では主にアンコール遺跡群やトンレサップ湖の観光、村の生活や学校の視察をした。中でも一番心に残っているのが小学校の訪問だ（写真 1）。私は学校自体少ないと思っていたし、教育を受けられるのはごく一部の子どもたちだけだと思っていた。しかし学校は日本や韓国の協力もあり数は増えていて、半日の授業ではあるが無償で受けることができている。教科書も校庭もある。7 歳も 12 歳も同じクラスで、クメール語の読み書きや簡単な算数を勉強していた。言葉は通じなかったが、私は子どもたちが学びを楽しんでいるように思えた。トンレサップ湖でのインタビューも印象的である。「家を遠くに移動した時に子どもたちの通学はどうするのか」という質問に、「家業の漁の便利さよりも、子どもたちの通学のしやすさを優先に考える」と答えていた。勉学は家の手伝いの二の次、という考え方が少しずつ変わってきているのだと感じ嬉しく思った（写真 2）。

9 日間全てにおいて私が目の当たりにしたのは、「貧しい国」という先入観とのギャップである。私はカンボジアに関する知識がほとんどなく、テレビなどの情報から勝手なイメージだけを持っていた。日本と違うところ、私の常識外なところはたくさんあったが、それはカンボジアらしさなのだと気付いた。現地の人の笑顔を見る限り、ただ貧しく辛い毎日を送っている人はいないと



写真 1. ロリオス村の学校



写真 2. 湖畔のハス畑の兄弟

感じた。逆に、きれいではない川で体を洗ったり、子どもが生きるため観光客にお金をせがんだり、その国らしさで片付けられない面も垣間見た。その都度日本での暮らしを見つめ直し、カンボジアの子どもたちに申し訳ない思いも抱いた。このように、現地で実際に見ること体験することがこんなにも価値観に影響を与えるとは思ってもよらなかった。外部の情報だけでは国際理解はできないのである。この経験は私が

将来教員になった時に役に立つはずだ。子どもたちにカンボジアの話をして、自分たちとは違う生活をしている子どもたちの存在を知り、興味を持ってくれたら嬉しい。

またカンボジアへ渡航する際、旅行会社のツアーではなくこうして金沢大学のインターンシップに同行する形で行けたことを嬉しく思う。公団の方たちのおかげでアンコール遺跡を観る時ただ観光するだけでなく、観光地を維持していく工夫や労力を感じることができたし、ガイドブックに書いていないような貴重な話もたくさん聞いた（写真3）。そしてもっと知りたいもっと公団の方とコミュニケーションしたいという気持ちが学習意欲を上げ、これまで苦手意識があった英会話も自分から積極的にできるようになった。そして金沢大学の学生が真剣に業務に励む姿を見て、単なる興味で参加した私が遺跡について勉強したくらい刺激を受けた。現地にも慣れ、同世代だった金沢大学の9人の存在は私にとってとても大きかった（写真4）。なによりも声をかけてくださった荒木先生、現地でお世話になった塚脇先生に感謝し、この経験を人生に活かしていきたい。



写真3. 英語で説明を受ける



写真4. 金沢大学の学生たちと

7. 資 料

2013 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップの概要

1. 参加者

(1) インターンシップ学生

- 笠井賀織（人間社会学域国際学類 国際社会コース 3 年，グループ 1）
- 小林睦実（人間社会学域経済学類 比較社会経済コース 3 年，グループ 1）
- 中村瀬奈（人間社会学域経済学類 比較社会経済コース 3 年，グループ 2）
- 田原綾女（理工学域環境デザイン学類 2 年，グループ 2）
- 辻 昌希（人間社会学域経済学類 経営・情報コース 3 年，グループ 3）
- 富田風華（医薬保健学域保健学類 看護学専攻 2 年，グループ 3）
- 村井芙美加（人間社会学域地域創造学類 福祉マネジメントコース 3 年，グループ 4）
- 島村陽恵（理工学域物質化学類 化学コース 2 年，グループ 4）

(2) チューター

- 笹田絵美（人間社会学域国際学類 米英コース 4 年）

(3) 連絡教員

- 塚脇真二（環日本海域環境研究センター・教授，8 月 21 日～9 月 9 日）

(4) 訪問職員

- 廣田典之（総務部総務課広報企画係，9 月 1 日～9 月 5 日）

(5) 埼玉大学

- 荒木祐二（教育学部 技術教育講座・准教授，9 月 1 日～9 月 13 日）
- 片野清夏（大学院教育学研究科 教科教育専攻技術教育専修 1 年，9 月 1 日～9 月 10 日）
- 山田晴菜（教育学部 教科教育コース技術専修 3 年，9 月 1 日～9 月 10 日）

2. カンボジア側受入機関/責任者

カンボジア国立アンコール遺跡整備公団（Authority for Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap, Kingdom of Cambodia） / Hang Peou 副総裁
兼水管理部門長

3. 各グループの担当業務

- グループ 1：北バライ貯水池の環境保全・観光整備事業
- グループ 2：クメール民族センターの観光整備事業
- グループ 3：西バライ貯水池の環境保全・観光整備事業
- グループ 4：ルン・タ・エク エコビレッジの整備事業

4. 全体日程

3月27日(水): アンコール遺跡整備公団と打合せ(シェムリアプ)
4月4日(木): インターンシップ説明会(国際学類生対象)
4月17日(水): インターンシップ説明会(全学生対象)
4月17日(水): インターンシップ参加者の募集開始
4月23日(火): 第1回実施委員会(実施概要の確認)
5月17日(金): インターンシップ参加申し込み〆切
5月21日(火): 第2回実施委員会(参加学生の選考会)
5月24日(金): 選考結果を応募学生へ通知
6月4日(火): 第1回インターンシップ事前説明会
6月28日(金): アンコール遺跡整備公団と打合せ(シェムリアプ)
7月16日(火): 第2回インターンシップ事前説明会, 前年度参加者との交流会
8月24日(土)～9月9日(日): インターンシップ実施期間(委細は下記)
10月8日(火): 海外異文化体験学習発表会(総合教育棟 D4 講義室: 2年生のみ)
10月15日(火): インターンシップ報告会(総合教育棟 A1 講義室)
11月12日(火): インターンシップ報告会(国際学類)
1月日(): インターンシップ報告書の出版

5. 渡航日程

8月24日(土): 金沢ー(チャーターバス)→関西国際空港ー(OZ111)→仁川空港ー(OZ737)→シェムリアプ
8月25日(日): アンコール遺跡世界遺産公園の見学, 滞在準備など
8月26日(月): インターンシップ始業式・各担当者との打合せ(午前)と業務(午後)
8月27日(火)～8月30日(金): インターンシップ業務に従事
8月31日(土): トンレサップ湖見学(午前), 自由行動(午後)
9月1日(日): バンテアイスレイ遺跡見学(午前), 自由行動(午後)
9月2日(月)～9月5日(木): インターンシップ業務に従事
9月6日(金): インターンシップ業務(午前), Hang Peou 副総裁との面談(午後), 公団職員との夕食会
9月7日(土): 自由行動(終日), シェムリアプー(OZ738)→仁川空港(8日到着)
9月8日(日): 仁川空港ー(OZ112)→関西国際空港ー(チャーターバス)→金沢

塚脇真二

2013 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ報告書

2013 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ実施委員会

古畑 徹（人間社会学域国際学類）

村上清敏（人間社会学域国際学類）

辻谷友紀（人間社会系事務部学生課人文・国際担当学務係）

塚脇真二（環日本海域環境研究センター）

発行所	金沢大学人間社会学域国際学類 金沢大学環日本海域環境研究センター 〒920-1192 石川県金沢市角間町 TEL (076) 264-5455 FAX (076) 264-5468
印刷 発行 印刷所	2014 年 1 月 日 2014 年 1 月 日 前田印刷株式会社 〒924-0004 石川県白山市旭丘 2-16 TEL (076) 274-2225 FAX (076) 274-5223

